

高校生の学校生活享受感と適応感の関連

—援助ニーズが抽出された学級への介入実践—

学籍番号 199206

氏名 木村太一

主指導教員 水野治久

第1章 問題の所在とA高等学校のニーズ

文部科学省によると、高校生の不登校生徒の割合は年々増加し、2019（平成30）年度の調査では、1.63%（61人に1人）の割合となっている。高校への進学率が9割を超える昨今、この時期の不登校は、進路選択や社会的自立に大きな影響を与える要因であり、将来的に社会的孤立を引き起こす危険性がある。

不登校問題については、A高等学校においても例外ではない。特に本年度は、新型コロナウイルス感染症に伴う休校という前例のない措置に直面し、A高校では不登校生徒、中途退学生徒の数が増加し、欠席・遅刻・早退の数も過年度と比較して最多となった。不登校生徒に対する個別の援助は言うまでもなく、不登校になる可能性のある生徒に対する予防的援助を実践することがA高校にとっては必要である。

第2章 学校生活享受感と学校への適応感の調査

今回、不登校の予防的援助を実践するため、まずはA高等学校に在籍する生徒の学校適応感に影響を与える要因・背景を明らかにする必要がある。そこで、2020年6月に、A高校の生徒249名を対象として質問紙調査が実施され、235名のデータを分析に使用した。測定尺度は小出・高橋・鶴養（2009）による学校生活享受感尺度と、大久保（2005）が作成した学校への適応感尺度である。学校生活享受感尺度について因子分析を行った結果、「学校の楽しさ」、「学校への登校意思」の2因子が抽出された。次に、学校への適応感尺度について因子分析を行った結果、「居心地の良さの感覚」、「被信頼・受容感」、「課題・目的の存在」、「劣等感の無さ」の4因子が抽出された。

次に、学校生活における享受感が学校への適応感にどのような影響を及ぼしているかを検討するため、学校生活享受感を独立変数、学校への適応感を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、学校生活享受感の「学校の楽しさ」は、どの学級においても「居心地の

良さの感覚」,「被信頼・受容感」,「課題・目的の存在」に有意な正の影響を与えていた。

続いて各学級の特徴を検討するため、全ての尺度の平均値を学級別に分散分析で検討した結果、「被信頼・受容感」と「課題・目的の存在」の下位尺度得点の平均値において、Zコースの6組が、他学級と比較して有意に低いことが明らかになった。

ここまでの調査・分析でA高校ではZコース6組に対して、「学校の楽しさ」を高めることのできる心理教育的援助サービスの実践が必要であることが明らかになった。

3章 Zコース6組への心理教育的援助サービスの実践

2020年10月下旬に、生徒指導部長、学級担任、筆者を含めコア援助チーム会議を開催し、先述した調査結果を報告した。この会議で、学級担任のニーズをくみ取り、6組生徒全員の「学校の楽しさ」を高めるために、一次的援助サービスを行うこととした。実際に、11月のホームルームの時間を使い、國分(1992)らが開発した「構成的グループエンカウンター(Structured Group Encounter: 略称SGE)」を『構成的グループエンカウンター事典』(國分・國分, 2004)を参考にして、3回にわたって実践した(50分×3回)。続いて、授業中に私語をする生徒や、いつも授業中にトイレに行く特定の生徒に関しては、二次的援助サービスを実施していくことにした。具体的には、山本(2016)による行動療法の手法を用いて、好ましい行動が強化されるような刺激を増やすというものである。この二次的援助サービスは、今後も継続的に実施していくことも確認した。

第4章 考察

本研究の第1の目的は、A高等学校に在籍する生徒が、学校不適応を示し不登校となる事態を予防するため、学校への適応感を規定する要因を学校生活享受感の中から抽出することであった。第2の目的は、学校不適応感を示す学級を抽出し、適応感を高める介入を実践することであった。

質問紙調査の結果分析により、学校適応感の「被信頼・受容感」,「課題・目的の存在」尺度の平均値が有意に低いことが示されたZコースの6組に焦点を当てて、一次的援助サービスとして、学校を楽しくするためのSGEの理論を用いた実践介入を行った。介入後、生徒からは「朝から気分がよくなった」,「褒められてうれしい」,「人の見方が変わった気がする」といった声が聞かれた。

本研究の課題としては、調査対象が特定の学年に限定されており、1年生から3年生にわたる全ての学年の生徒を対象としていなかった。本研究で、A高校はコースまたは学級によって学校への適応感を規定する要因や、各尺度の平均値が異なることが示されたように、学年間でも平均値の差異が認められる可能性がある。さらに今回介入実践したSGEの効果については検討されていない。今後、6組の学校への適応感がどのように変化しているのかどうかを再調査することが、本研究の課題である。